

旧御所村育ちの芥川賞候補作家

儀府成一（ぎふせいいち）の足跡

会 員 関 敬 一

旧御所村西安庭(片子沢)に生まれ、幼少のころから少年時代まで大村地区・男助で育った童話作家の儀府成一(ぎふ せいいち・ペンネームは母木光【ははきひかる】)は、養母みちさんから毎晩聞かせてもらう『昔っこ』が大好きな子どもでした。幼いころの名前は「藤本吉四郎」といいました。

吉四郎(その後「光孝」に改名)はやがて、詩歌文学に目覚め、宮沢賢治らとの交友の中で詩集の編集などを経て、小説家儀府成一となり、数々の文学作品を書いています。

そして、儀府が32歳の昭和15年、自身の小説「動物園」が第12回芥川賞の候補作となったことで一躍注目されました。(儀府は、4年後にも小説「碑文」で第19回芥川賞の候補作品に選ばれています。)

若かりし頃から晩年まで、常に「ふるさと御所・雫石」を想い続けた人でした。ここに、その全足跡をたどります。



儀 府 成 一 〔本名 藤本光孝。幼名 藤本吉四郎〕

1909(明治42)年1月3日御所村生まれ。五男五女、十人兄弟の八番目。幼少時に生家の西安庭・伝久の高橋家から大村・男助の藤本家(屋号槻根・つきね)に養子に入る。

当時の住所 岩手郡御所村南畑第15地割38番地2

〔養父 藤本堅藏(生没年不明)、養母 藤本みち(昭和39年2月8日没・84歳)。〕

〔養曾祖父 留之助(びっこあま・文政2年生まれ)、養祖父 広吉(ひろ鍛冶)〕

- ◆養家には雇い人が多く、みんな「(山の)蔭(かげ)から来た」ということに関心を抱いた。(あったとき物語あとがき) なお「蔭」とは、紫波町山王海方面のことらしい。

〔学歴〕

大正 4年4月 1日 南畑尋常小学校大村分教場 入学 (6歳)
 大正 10年3月 日 同 上 卒業(6年制・第12回卒業生)
 大正 10年4月 1日 安庭農業補習学校入学
 大正 11年3月 日 同 上 修了(1年制)
 大正 11年4月 1日 雫石尋常高等小学校 高等科入学(編入)
 大正 12年3月25日 同 上 卒業(2年制の内1年) (14歳)

著書で「10代で養家を飛び出した」と述懐しているが、実際は「中学校受験のため生家に呼びもどされた」のが真相のようである。

- ◆14歳で生家に連れ戻される。しかし、養家への絶ち難い思いが詩作へのエネルギーになった。

◆ 13歳年上の宮沢賢治が「七つ森」を描いた短歌や詩に感動と戦慄覚える。

〔職歴〕

昭和初期 雑誌記者（→詳細不明）、出版社勤務〔富士図書、普通社、東光書房〕。

終戦で海軍から復員後 自宅近くで農業の傍ら御所村広報の編集などに携わる。その後再び上京、中央での執筆活動と岩手の新聞への寄稿活動を続ける。

詩も書き、小説をものし、翻訳もした。

ペンネームは、儀府成一のほか<母木 光>、<範近宏一（詩の同人誌「大鳥」時代）>、<月丘きみ夫>主な著作に童話集「河馬の名刺」、「暮色の鶏」、「雪色のペガサス」、「終着駅の小鳥たち」、少年詩集「お菓子の話」、民話童話集「あったとさ物語」「十五夜さま」「さささ・さらさら」「雫石よしゃれ譚」、「人間・宮澤賢治」、「宮澤賢治・その愛と性」。

そのほか新聞掲載の随筆、書評の作品も多数。

◆氏は町立大村小学校校歌の作詞者である。

2番の歌詞は…母の語りをイメージしたと語っている。（「大村の民話」あとがき）

（写真は大村小学校100周年記念誌から）



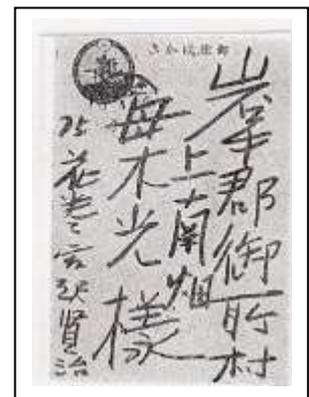
大村小学校校歌

儀府成一 作詞
鷹嘴洋一 作曲

（二番）
御所のみなもとみなみ川
澄んで流れる音さえも
みんな伸びまじよはげみまじよ
とわにやさしい水の声
山のふところ平和な学び舎
あわれらの大村小学校

◆同 雫石小学校（100周年）賛歌作詞者

（氏は同校の卒業生でもある。）



母木光の宮沢賢治とのハガキ、書簡等での交流の状況

昭和5年9月26日 宮澤賢治（明治29年8月生まれ。吉四郎より13歳年長）から「岩手郡御所村上南畑 岩手詩集刊行会 母木 光」あての書簡が届く。母木光（ははき ひかる）は吉四郎のペンネーム。内容は「岩手詩集刊行の趣旨に賢治が理解を示し、本人と花巻の詩人達に寄稿を勧める予定である。ただし編集委員は遠慮したい。」というものであった。

- 1 1月2日 母木へ葉書「童話集1冊贈る。…回りに出稿勧めておいた」
4日 母木へ書簡「3人分の原稿送る」

昭和7年4月15日 「岩手詩集」第一集（岩手郡御所村岩手詩集刊行会編者母木光）を刊行。宮澤賢治が作品「早春告白」を寄稿している。一級のアソロジー（注；異なる作者による詩文などの作品を集めたもの。選集、詩撰、歌撰。語源は 古代ギリシア語の「アントロギア」。これは「花束」を意味する）と評価されている。

昭和7年5月10日 宮澤賢治から母木光あて書簡が届く。内容は〔花巻を訪問されるとのことですがお待ちしています。ただ昨今肺炎を再び患いまだに起居談話自由ならず、まことに失礼な形でお目にかゝる次第ですから何卒その辺お容し置きねがひます。（中略）ではまたその節…〕というものであった。

5月14日 母木が花巻の自宅を訪問。この訪問記（儀府成一として書いた）が岩手日報に掲載された。

6月19日 母木へ書簡「母木が自作の童話『ワラシと風魔』を賢治に贈り、批評を乞うたことへの返事等」

昭和8年3月 7日 母木へ書簡「近況を書いて、御地のような場所で自然への精密な観察は新しい童話への資源だらうと存じます。…ほか」

4月25日 母木へ葉書「詩集の発刊を祝う…。労働はにわかに烈しくなさないように…と母木を気遣う。」

6月17日 母木へ葉書「(創作詩集) 二十人集について」…ほか。

7月16日 母木へ葉書「8月10日頃のご来花をお待ちしている…」ほか

8月19日 母木が花巻の自宅を二度目の訪問。「知己の詩人たちの話が出て時間が経過した。」浮世絵のコレクションを見せた。

8月23日 母木へ書簡「母木の健康をかなり心配している、と書き連ねる」

9月 5日 母木へ書簡「お身体のお加減いけないようですが、どうかせつかくご自愛早くご元気になって、次のお仕事お見せください。（中略）ずあぶん残暑の続く歳です。」

◆賢治の死後も彼が愛した雫石の豊かな自然を大切に感じて過ごした。

文学との関わり

学校卒業後も「三つ児の魂、百まで」の言葉どおり、民話や詩作に関心が強く19歳で処女詩集を刊行。24歳の頃から晩年の宮澤賢治と交際が始まり花巻の自宅も2度訪問しています。昭和8年9月23日の賢治の葬儀の際に友人代表としての弔辞を書きました。

その後、幼少期の母から昔語りを聞いた原体験に加えて、民話や口碑が文学にまで高められた『遠野物語』に出会ったことで、——民話をもとにした童話もまた文学でありたい——と民話童話作家を志した。〔「あったとさ物語」より〕

◆「あったとさ物語」ほかの作品は——生前報いられることの少なかったわが“語り部の母”の霊に深い感謝を込めて捧げるもの——である、としている。〔「あったとさ物語」より〕

上京後、雑誌社や出版社勤務を経験する傍ら作家活動を展開、昭和 15 年に東北地方（岩手県）の方言による会話を主にした小説「動物園」は第 12 回芥川賞候補となった。

この小説は、前年の 10 月に「現代文学」に発表した作品である。一家 13 人全員が全て動物とゆかりのある名前であったことから、“動物園”とあだ名された家族の物語。

儀府は“純粋な方言を作品の中に生かし、活字に移そうとした”と述懐しているが、当時の選者たちには読みづらさが指摘され、受賞には至らなかった。

奇しくも同時に芥川賞候補となった森壮巳池の「氷柱」も方言使用で同様の目に遭っている。

儀府の「動物園」は、平成 5 年 8 月「ふるさと文学館」第四巻（岩手）に掲載されている。

〔芥川賞雑感〕

第 158 回芥川賞が、4 日前の 1 月 16 日決まり、2017 年度は上下半期とも岩手県人の作家が受賞した。上半期は盛岡市の沼田真佑さんが「影裏」で、下半期は遠野市出身の若竹千佐子さんが「おらおらでひとりいぐも」で連続受賞の快挙。下半期の直木賞には群馬県出身の門井慶喜さんが賢治親子を題材にした「銀河鉄道の父」で受賞した。

本県からは、直木賞が森壮巳池氏から高橋克彦氏まで 5 人出ているが、芥川賞は今年度の沼田さんが初受賞。若竹さんがこれに続いて 2 回連続の受賞となった。

それにしても、今回の両賞の受賞作とも岩手の方言を前面に出した作品であり、儀府成一や森壮巳池が受賞を逃した際は、その理由がいずれも「方言の読みづらさ」にあったということを見ると、表現の巧拙だけではなく「方言の持つ独特の温かさ」がいわゆる“市民権を得た”からなのだろう。まさに隔世の感がある。

儀府成一の晩成期の作品には、前掲したように昭和 49 年、民話の童話集「ささき・さらさら」をはじめ、50 年の少年詩集「お菓子の話」。昭和 57 年、郷里に取材した「雫石よしやれ譚」を刊行。同 59 年には自選詩 11 編及び“わが遍歴”を「クリップ」に発表している。

平成 2（1990）年、夫人の藤本雪子詩集「かたことの天使」の編集が最後となった。

◆儀府さんは、ふるさと雫石（御所）への思いを、雫石町広報「しずくいし」昭和 51 年 7 月号に寄稿して下さった。（別紙）

晩年

時に肺炎を病むこともあったようだが、最期は安らかな旅立ちであったという。

死亡年月日 2001（平成 13）年 6 月 6 日 92 歳

死亡時住所 千葉県柏市光ヶ丘住宅 43-43

菩提寺は狸囃子（ばやし）で知られる証城寺。墓地は千葉県袖ヶ浦市市営墓園にある。

妻は藤本雪子さん（岩手県一戸町小鳥谷のご出身）。

参考にした資料等

「岩手の近代文藝家名鑑」・「あったとさ物語」「宮沢賢治年譜」

盛岡タイムス杜陵雑感「浦田敬三」（H15・6・7）ほか、片子沢のご実家「伝久」さんの高橋紀子さんからもお話を伺った。